曹氏兄弟と魏王朝

柳川　順子

はじめに

後漢王朝の末年となった二二〇年の一月、魏王曹操（一五五―二二〇）が洛陽で没すると、子の曹丕（一八七―二二六）がその跡を継ぎ、同年冬十月には、後漢王朝の禅譲を受けて、曹丕は魏の文帝として即位する。そして、彼は帝位に就くやいなや、その弟たちに、侯としてそれぞれ既に封ぜられていた土地へと赴くよう命じた①。これより以降、曹植（一九二―二三二）をはじめとする曹氏兄弟は相互の交流を断ち切られ、孤絶する彼らの身に王朝からの厳しい監視体制が敷かれることとなった。

こうした魏王朝の体制を批評して、たとえば『魏志』巻二十・武文世王公伝の裴松之注に引く『袁子』は次のように述べている。

魏興、承大乱之後、民人損減、不可則以古始。於是封建侯王、皆使寄地、空名而無其実。王国使有老兵百餘人、以衛其国。雖有王侯之号、而乃儕為匹夫。県隔千里之外、無朝聘之儀、隣国無会同之制。諸侯游猟不得過三十里、又為設防輔監国之官以伺察之。王侯皆思為布衣而不能得。既違宗国藩屏之義、

又虧親戚骨肉之恩（魏の興りしときは、大乱の後を承け、民人は損減し、則るに古始を以てす可からず。是に於いて侯王を封建するに、皆地に寄せしむるに、空名にして其の実無し。王国には老兵百餘人を有せしめ、以て其の国を衛らしむ。王侯の号有りと雖も、而も乃ち匹夫為るに儕し。千里の外に県隔せられ、朝聘の儀無く、隣国にも会同の制無し。諸侯は游猟するに三十里を過ぐるを得ず、又為に防輔・監国の官を設けて以て之を伺察せしむ。王侯は皆布衣為らんと思ふも得る能はず。既に宗国藩屏の義に違ひ、又親戚骨肉の恩に虧けたり）。

魏王朝が興った当初は、大乱の後を受けて、民は減少し、旧き良き時代を模範とすることができなかった。そこで、侯王に領土を封ずるのに、皆その土地に身を寄せさせたが、封建とは名ばかりで実を伴っていなかった。王国には老兵百餘人を擁せしめてその国の護衛に当たらせた。王侯の称号があるとはいっても、平民であるのに等しかった。諸侯王は千里の外に隔てられ、朝廷からの招聘の沙汰もなく、隣国どうし会合する制度もなかった。諸侯は出遊に三十里を超えてはならず、加えてわざわざ防輔・監国の官が設けられ、彼らの動向を監視した。王侯たちは皆一介の平民になりたがったけれども叶わなかった。これは、諸侯が朝廷の守りとなるという義にもとるばかりか、親戚骨肉の恩情にも欠ける仕打ちだ。

『袁子』は、『隋書』巻三十四・経籍志三・子部・儒家類に『袁子正論』と著録されている書物で、その著者である袁準は、魏朝草創期の重臣である袁渙の子であり、また、『世説新語』文学篇・雅量篇によるならば、魏晋交代期の阮籍・嵇康とも交流があったらしい人物である。すると、ここに記されていることは、王朝のある局面の内実を間近で見ていた当人の貴重な証言、あるいはその聞き書きに根拠を置いた論評と言い得るだろう。

では、曹丕はなぜ、血肉を分けた弟たちをここまで冷遇したのだろうか。特に同母弟の曹彰や曹植に対しては、端的に言って、曹丕が彼らのことを、自らの地位を脅かす存在だと見ていたからであろう。その

ことを示す逸話として、魏の魚豢の『魏略』（『魏志』巻十九・任城威王彰伝の裴注に引く）に次のような記事が見えている。すなわち、曹彰は、父曹操が亡くなった時、洛陽に駆け付けるや曹植に向かって、「先王が私を召したのは、お前を（魏王に）立てたいからだよ」と言ったが、曹植は「いけない。袁氏兄弟（袁紹の子ら、特に譚と尚）の成り行きを見よ」と答えた、と。また、同伝の裴注に続けて引く『魏略』の別の条には、曹丕が魏王として立ち、曹操の埋葬が終わるとすぐに曹彰を鄢陵へ赴かせ、中牟を治めるよう命じたことが記されている。この命は、前掲の王位継承にまつわる彼の言動が招き寄せたものだろう。一方、曹植が受けた同様の処遇も、これと同根に出るものと誰もが見るところだろう。それは、『魏志』巻十九・陳思王植伝における、この間の出来事の記載順からも明らかである。すなわち、才能豊かな曹植を、丁儀・丁廙・楊修らが羽翼となって曹操の後継者に推したこと、にもかかわらず、曹植がたびたび曹操の期待を裏切る行為に出る一方、曹丕は自重を心掛けて周囲の後押しを取り付けたこと、そして、この一連の経緯に続けて、「文帝即王位、誅丁儀・丁廙并其男口。植与諸侯並就国（文帝は王位に即きて、丁儀・丁廙并びに其の男口を誅す。植は諸侯と並びに国に就く）」と記されていることである。これによるならば、曹植をその封土である臨淄へ赴かせたのは、曹丕が自身の地位を死守するための謀略の延長線上にあるものと見るのが妥当であろう②。

だが、曹丕という人物は、果たしてこのように冷酷一方の人間だったのだろうか。彼の別の側面として、為政者としての凡庸さや人としての弱さは認めざるを得ない③。しかし、史料から看取される彼の横顔は、必ずしもそのような表情ばかりでもない。また、曹植の書き残した詩文を通して見ても、曹丕とその弟、特に曹植との間柄については、まだ十分に考究されているわけではない部分があるように思う。本稿は、曹植作品や『魏略』等の歴史資料に基づいて、曹丕・曹植を中心とした曹氏兄弟の関係性を洗い直し、その先に、このような状況を生じさせた魏王朝ならではの事情を見通すところまで、現在の自分なりの考えを述べてみたい。

一

曹丕は曹植に対して、内心では骨肉の情を抱き続けていたのではないだろうか。そう思うようになったのは、たとえば次のような史料に遭遇し、曹丕に対する一般的な先入観とは相容れない、その逸話の意味するところが念頭を去らなかったからである。細かいニュアンスをそのまま伝えるために、少し長くなるが、そのほぼ全文を引用したい。『魏志』巻二十三・裴潜伝の裴注に引く『魏略』にいう。

韓宣……嘗於鄴出入宮、於東掖門内与臨菑侯植相遇。時天新雨、地有泥潦。宣欲避之、閡潦不得去、乃以扇自障、住於道辺。植嫌宣既不去、又不為礼、乃駐車、使其常従問宣何官。宣云、丞相軍謀掾也。植又問曰、応得唐突列侯否。宣曰、春秋之義、王人雖微、列于諸侯之上。未聞宰士而為下士諸侯礼也。植又曰、既如所言、為人父吏、見其子応有礼否。宣又曰、於礼、臣子一例也、而宣年又長。植知其枝柱難窮、乃釈去、具為太子言、以為辯。黄初中、為尚書郎、嘗以職事当受罰於殿前、已縛、束杖未行。文帝輦過、問、此為誰。左右対曰、尚書郎渤海韓宣也。帝追念前臨菑侯所説、乃寤曰、是子建所道韓宣邪。特原之、遂解其縛（韓宣……嘗て鄴に於いて宮に出入し、東掖門の内に於いて臨菑侯植と相遇ふ。時に天新しく雨ふり、地には泥潦（とど）有り。宣は之を避けんと欲するも、潦に閡（さまた）げられて去るを得ず、乃ち扇を以て自ら障（さへぎ）りて、道の辺に住まる。植は宣の既に去らず、又礼を為さざるを嫌ひて、乃ち車を駐め、其の常従をして宣に何れの官なるかを問はしむ。宣は「丞相の軍謀掾なり」と云ふ。植又問ひて曰く「応に列侯に唐突するを得べけんや否や」と。宣曰く「春秋の義に、王人は微なりと雖も、諸侯の上に列すと。未だ宰士にして下士の諸侯の為に礼するを聞かざるなり」と。植又曰く「既に言ふ所の如くんば、人の父の吏為りて、其の子に見えて応に礼有るべけんや否や」と。宣又曰く「礼に於いて、臣・子は一の例なるも、宣は年又長ず」と。植は其の枝柱にして窮し難きを知り、乃ち釈し去り、具に太子の為に言ひて、以て辯と為す。黄初中、尚書郎と為り、嘗て職事を以て罰を殿前に受

くるに当たりて、已に縛せられ、束杖は未だ行はれず。文帝輦もて過り、「此は誰為らん」と問ふ。左右対して曰く「尚書郎の渤海の韓宣なり」と。帝は前に臨菑侯の説く所を追念し、乃ち寤(さと)りて曰く「是れ子建の道(い)ふ所の韓宣なるか」と。特に之を原(ゆる)し、遂に其の縛を解かしむ)。

韓宣……（建安中）嘗て鄴で宮中に出入し、東掖門の内で臨菑侯曹植と鉢合わせした。ちょうど雨がふったばかりで、地表には水たまりができていた。韓宣は曹植を避けようとしたが水たまりに阻まれて退くことができず、それで扇で自分の顔を隠して、道端に立ち止まっていた。曹植は、韓宣が立ち去らない上に、礼儀も示さないのを嫌って、そこで車を停め、侍従に韓宣が何の官職なのかを問わせた。韓宣は「丞相（曹操）の軍謀掾だ」と言った。曹植は重ねて「列侯にぶつかっていいものか」と問うた。韓宣は「『春秋』の義では、王の臣下は微賤であっても、諸侯よりも地位が高い。丞相の属官で、つまらぬ諸侯のために礼儀を示すなど聞いたことがない」と言う。曹植が「たとえ言うとおりだとしても、人の父の吏員で、その子に対面して礼儀を示さないでいいものか」と重ねて問うと、韓宣はまた「礼においては臣下と子とは同一ですが、わたくしは年齢もまた上です」と言う。曹植は彼が手強くて論破が難しいことを知って、釈放してやり、このことをつぶさに太子に話し、弁の立つ者だと評した。黄初年間中、韓宣は尚書郎となり、職務上のことで宮殿の前で罰を受けることとなって、すでに縄で縛られ、杖打ちはまだ執行されていないとき、文帝曹丕が輦に載って通りかかり、「これは誰か」と問うた。左右の者が「尚書郎の渤海の韓宣です」と答えた。文帝は以前に臨淄侯曹植が話していたことを思い出し、それで気づいて「この者が子建の言っていた韓宣か」と言って、特別に彼を赦し、とうとうその縄をほどかせてやった。

この逸話でまず目を引くのは、若気の至りで不遜な言動をほしいままにする、二十代半ばの曹植の姿である。それはたとえば、車に乗って主君専用道路を行き、宮城の司馬門を勝手に開けさせたという、建安二十二年（二一七）頃の彼の逸話（『魏志』本伝）を彷彿とさせる。他方、手強い相手の知力を認め、

兄にもその者とのやり取りを話して聞かせるところには、いかにも育ちのよい健やかな精神の横溢を見るようだ。いずれにせよ、ここには、後半生の彼がまとうことになる悲劇性は微塵も感じ取れない。

そして、それ以上に注目すべきは、逸話の後半に現れる曹丕の言動である。彼が韓宣を釈放したのは、すでに魏の文帝として在位していた黄初年間のことであるが、この措置は、かつて曹植が話題にしていた人物だからという理由だけで為されたものであった。この曹丕のふるまいは、為政者としては公平さに欠けるものだろう。一方、これを兄弟愛というプライベートな視点から見たならば、懐の深い、兄らしい行いだと言えるかもしれない。数年前、才気煥発たる弟の言うことに興味深く耳を傾け、以来、こんな面白い男がいたのだという話をずっと心に留めていて、その人物評によってその者への処遇を決めたのだから。実の弟が一貫して嫉妬や倦厭の対象でしかなかったならば、どうしてこのような言動が生じ得よう。もっともこれは、後継者争いの形勢がすでに決した後での、勝者ならではの余裕なのだという解釈も成り立ち得るのかもしれない。それでも、ここから窺えるのは、実の弟を虐げ続ける冷酷非情な兄、といった通り一遍の曹丕像からは程遠いものだろう。

また、『魏志』本伝の裴注に引く『魏略』には次のような逸話も記されている。黄初四年（二二三）、鄄城王であった曹植が、任城王曹彰や呉王曹彪ら兄弟たちとともに、文帝曹丕から都洛陽に呼び寄せられた際の出来事である。

初植未到関、自念有過、宜当謝帝。乃留其従官著関東、単将両三人微行、入見清河長公主、欲因主謝。而関吏以聞、帝使人逆之、不得見。太后以為自殺也、対帝泣。会植科頭負鈇鑕、徒跣詣闕下、帝及太后乃喜。及見之、帝猶厳顔色、不与語、又不使冠履。植伏地泣涕、太后為不楽。詔乃聴復王服（初め植未だ関に到らざるとき、自ら過ち有るを念ひ、宜しく当に帝に謝すべしとす。乃ち其の従官を留めて関東に著かしめ、単に両三人を将ゐて微行し、入りて清河長公主に見え、主に因りて謝せんと欲す。而るに関吏以て聞すれば、帝は人をして之を逆へしむるも、見ふを得ず。太后は以て自殺せるなりと

為し、帝に対して泣く。会植（たまたま）は科頭に鈇鑕を負ひ、徒跣もて闕下に詣（いた）れば、帝及び太后は乃ち喜ぶ。之に見ふに及びて、帝は猶ほ顔色を厳しくし、与に語らず、又冠履せしめず。植は地に伏して泣涕し、太后は為に楽しまず。詔して乃ち王服に復するを聴す）。

初め曹植はまだ関所に到着していないとき、自身に罪過があることを繰り返し思い、皇帝（兄の曹丕）に謝罪すべきだと考えた。そこで、従者を関所の東に留めおいて、二三人だけを連れておしのびで都入りし、清河長公主（腹違いの姉）に会って、彼女を通じて皇帝に謝罪しようとした。ところが関所の役人が（曹植の到着を）奏上したので、皇帝は出迎えに人を遣ったが、会うことができなかった。太后（母の卞氏）は曹植が自殺したのだと思って、皇帝に向かって涙を流した。そこにちょうど曹植がむきだしの頭で首切りの道具を背負い、素足で宮闕の下にやって来たので、皇帝と太后はなにはともあれ喜んだ。だが、彼に対面する段となって、皇帝はなお厳めしい顔つきを崩さず、口も利かず、また（王位の）冠や履物も身につけさせなかった。曹植は地にひれ伏して涙を流し、太后はそのために不機嫌だった。詔勅によりなんとか王服に戻ることが許された。

ここには、王朝の一族というよりも、曹家の家庭内の様子が垣間見えるようで、とりわけ興味深いのが長男曹丕の態度である。まず、弟の到来を知るや彼を出迎えようとする。うまく出会えなかった弟が到着すると、母とともに喜びあったが、いざ対面となると仏頂面をしている。内心では弟に愛情を持っているのに、立場上、重々しい態度を取らざるを得ない兄の苦渋がにじみ出ているような逸話である。

これもまた前掲資料と同様、曹丕が曹植を敵対視し続けていたと捉える限りは、適切な着地点の見えてこない逸話だろう。そして、以上に紹介した二件の記事はいずれも魚豢の『魏略』に出るものであって、この史書の依拠した原資料、及び本書の成立経緯や撰者の立ち位置から見て、かなり信憑性の高い同時代史料であると判断される④。そうである以上、これらの逸話を無視するわけにはいくまい。では、文帝曹丕の実像は、いったいどのあたりに焦点を絞れば見えてくるのだろうか。それには、曹植との関係性

を視野に入れることが不可欠となるだろう。

二

前章に見たとおり、曹丕はその本性として決して冷酷非情な人間ではない。かといって、かつて筆者が捉えたように⑤、情に脆く、それだけに公事に私心を持ち込みがちな、為政者としての資質に今ひとつ欠ける人物と言い切るのも何かが違う。というのは、文帝曹丕の在位期間における、魏王朝の曹植に対する処遇を辿っていくと、ある傾向が見て取れるように思うからである。

まず示したいのは、黄初二年（二二一）、朝廷からの使者に対する曹植の悪態が、監国謁者⑥滏均によって摘発された一件の顛末である。この時に朝廷で行われた議論について、『文選』巻二十、曹植「責躬詩」の李善注に引く『（曹）植集』は、「博士等議、可削爵土、免為庶人（博士等の議すらく、爵土を削り、免じて庶人と為す可し）」と記す。爵位と封土を削り取り、身分を庶人に落とすとは、非常に厳しい処遇であろう。だが、この結果を受けた文帝曹丕は、「植、朕之同母弟。朕於天下無所不容、而況植乎。骨肉之親、舎而不誅。其改封植（植は、朕の同母弟なり。朕は天下に於いて容れざる所無し、而して況んや植をや。骨肉の親として、舎（ゆる）して誅せず。其れ植を改封せよ）」と詔してこれを退けている（『魏志』本伝裴注に引く『魏書』）。『魏志』本伝によれば、この寛大な措置は、彼らの母、卞太后の計らいによるものであったというが、いずれにせよ、この詔により、曹植は臨淄侯から安鄉侯に移されただけで済み、しかもそれは実態を伴わないものであったらしく、その後まもなく鄄城侯に封を改められている⑦。

次に示すのは、前掲の一件が落着して後、重ねて起こった同質の事件である。鄄城侯に任ぜられた曹植は、またもや東郡太守王機によってありもしない罪を誣告されたが、この時も文帝によって援護されているのである。このことは、後年、曹丕の来訪を受けて曹植が雍丘の領内に発した「黄初六年令」（『曹集詮評』巻八）に、自らが被った誣陥を記した後に、「賴蒙帝王天地之仁、違百寮⑧之典議、舎三千之首戻、

反我旧居、襲我初服、雲雨之施焉有量哉（頼（さいはひ）に帝王が天地の仁を蒙りて、百寮の典議に違ひて、三千の首戻を舎して、我を旧居に反し、我を初服に襲（よ）らしめ、雲雨の施しに焉んぞ量（かぎ）り有らんや）」と回想しているとおりである。

この二つの出来事で注目したいのは、弟に対する曹丕の恩情ばかりではない。曹植の動向を監視し、逐一ことさらに報告する者の存在、そして、文帝曹丕の下で、曹植の処遇を議論する者たちの、ある傾きを持った強い意向である。このことは、『文選』巻二十四、曹植「贈白馬王彪」詩の李善注に引く『（曹植）集』に、黄初四年、白馬王（当時はまだ呉王）彪と同行していた洛陽からの帰途上のこととして、「後有司以二王帰蕃、道路宜異宿止（後に有司以（おも）へらく二王の蕃に帰るに、道路は宜しく宿止を異にすべしと）」と記されていることを想起させる。そこでも、兄弟の間を裂き、曹植を窮地に追い詰めたのは、文帝その人ではなくて、魏王朝に仕える官吏であった。

文帝曹丕と曹植との間に介在するこれらの者たちは、いずれも曹植に対して厳酷な姿勢を取る。しかもそれは、ひとり曹植においてのみ認められるのではない。同様の措置は、他の兄弟たちにも等しく適用されたのであって、たとえば、曹植の異母弟にあたる曹衮はその筆頭であろう。『魏志』巻二十・武文世王公伝（中山恭王衮）によると、彼は、その善行を朝廷に奏上しようとした文学・防輔らの属官を厳しく譴責し、死を目前にしては、跡を継ぐ我が子に、王族の一員として慎み深く生きよと訓戒する文章を残しているが、彼の一分の隙もないこの慎重さは、常にその身辺に監視の目が張り巡らされていたことに深く起因するだろう。彼は、曹植の身に起こった事柄を風の便りに聞いていたかもしれないし、そうでなくとも、自身の気の緩みが容易に罪過を呼び寄せることを熟知していたはずである。

さて、こうした曹魏王朝の体制は、王朝成立に先立つ延康年間（二二〇）の次の出来事をも想起させる。すなわち、曹操が崩御して約半年後のこと、亡父を祭らせてほしいと願い出た曹植に対して、まだ後漢王朝からの禅譲を受けていなかった時期の魏王曹丕は、博士たちの議論に依拠してそれを却下したのであった。『太平御覧』巻五二六に収載される曹植「請祭先王表（先王を祭らんことを請ふ表）」には、そ

の後に続いて次のような記事が附せられている。

博士鹿優韓蓋等以為、礼公子不得禰先君、公子之子不得祖諸侯、謂不得立其廟而祭之也。礼又曰、庶子不得祭宗。詔曰、得月二十八日表、知侯推情、欲祭先王於河上。覧省上下、悲傷感切、将欲遣礼以紓侯敬恭之意、会博士鹿優等奏礼如此。故写以下。開国承家、顧迫礼制。惟侯存心、与吾同之（博士の鹿優・韓蓋等以為らく「礼に公子は先君を禰とするを得ず、公子の子は諸侯を祖とするを得ずといふは、其の廟を立てて之を祭るを得ざるを謂ふなり。礼にも又た曰く、庶子は宗を祭るを得ず、と」と。詔に曰く「月二十八日の表を得て、侯が推情、先王を河上に祭らんと欲するを知る。上下を覧省するに、悲傷感切にして、将に礼を遣りて以て侯が敬恭の意を紓（ゆる）めんと欲せしとき、会（たまたま）博士の鹿優等　礼は此くの如しと奏す。故に以下を写す。国を開き家を承くるは、礼制を顧迫すべし。惟れ侯が心に存するは、吾と之を同じうす」と。

博士の鹿優・韓蓋等は次のように考えた。すなわち、礼に、公子は先君を禰（父のみたまや）とすることはできないし、公子の子は諸侯を祖とすることはできない、とあるが⑨、これは、その廟を立てて祭ることはできないという意味である。礼にはまた「庶子（非嫡子）は宗廟を祭ることはできない」ともある⑩、と。文帝（当時は魏王）の詔にいう。「月二十八日の上表を落手して、侯（臨淄侯である曹植）が衷心なる真情から、先王を河上に祭りたいと願っていることがわかった。上表を最初から最後まで仔細に読むと、悲痛な思いが切々と迫ってきて、いざ贈り物を送って侯の敬恭の思いを慰撫しようとした矢先、ちょうど博士の鹿優等が、礼ではこうなっていると上奏してきた。それゆえ、以下のとおり書す。国を開き家を継いだ者は、礼の制度を厳正に守らねばならない。ただ、侯が心に念じていることは、自分もこれを共有している、と」。

ここに記された出来事は、前掲の文帝曹丕が行った曹植に対する特別待遇と、その結果こそ正反対で

はあるものの、次の点において共通している。すなわち、曹植の境遇や言動に対して、曹丕が心情的に寄り添おうとしている点、そして、朝廷に仕える博士たちがこれを冷徹に阻止しようとしている点である。筆者は当初、この魏王曹丕の発した公文書を読んで、彼は弟を押さえつけるために博士の言葉を援用しているのかと疑った。弟曹植を冷遇し続ける、為政者としては二流どころの兄曹丕、という自身の固定観念から一歩も出ていなかったのである。だが、黄初年間の曹植の詩文を精読し、そこに記されているこの間の文帝曹丕の動向に補助線を引いてみたとき、始めてその自らの曹丕像に歪みがあることを悟った。歪みは矯め直さなければならない。それでないと、彼らの生きた実相が見えてこないではないか。

こう考えて、これまで読んできた曹植作品を振り返ってみると、限られたそれらの中からも、かつて感じたことのない色味を示すいくつかの表現が浮かび上がってくる。たとえば、黄初年間中の作「鼙舞歌・聖皇篇」（『宋書』巻二十二・楽志四）の、聖なる皇帝の即位を慶賀した後に続く次のような辞句である。

三公奏諸公、不得久淹留。蕃位任至重、旧章咸率由⑪。侍臣省文奏、陛下体仁慈。沈吟有愛恋、不忍聽可之。迫有官典憲、不得顧恩私。諸王当就国、璽綬何累縗（三公奏すらく「諸公は、久しく淹留するを得ず。蕃位　任は至って重ければ、旧章に咸率ひ由るべし」と。侍臣　文を省べて奏すれど、陛下は体仁慈なり。沈吟して愛恋する有り、聽きて之を可とするに忍びず。官の典憲有るに迫られて、恩私を顧みるを得ず。諸王　国に就くに当たりて、璽綬　何ぞ累縗たる）。

三公（太尉・司徒・司空）から次のような奏上があった。「諸公は、いつまでも都に留まっていることはできない。封建諸侯としての任務は極めて重大であるから、旧法に全面的に則って、それぞれの封土へ赴くべきである」と。近侍の臣下たちは、その文章を精査して皇帝の閲読に供したが、陛下は生来、気持ちの優しい質であって、骨肉への愛着の気持ちからあれこれと思い悩んで決断できず、その奏上を聴き入れることに耐えられなかった。だが、役人たちの示す典範に迫られて、私心より出る恩情を顧慮することもできない。かくして、諸王はそれぞれの国に赴くことになったが、

その爵位を示す印綬のなんと盛大に光り輝いていることか。

この楽府作品は、漢代の「鼙舞歌・章和二年中」を踏襲し、後漢章帝の章和二年（八八）に起こった出来事にそのまま依拠して作られたものではあるけれど⑫、その内容に魏王朝ならではの要素が含まれていることから、実質的には、魏王朝の成立と同時に、曹植ら諸侯がそれぞれの封土に赴かされたことを歌うものと見て、十中八九間違いあるまい。すると、ここに登場する皇帝とは文帝曹丕その人だということになる。そして、この新皇帝は、周囲の重臣や侍臣たちに迫られて、弟たちを都から各地へ送り出すことを余儀なくされたのだと、そう曹植は詠じているのである。『魏志』本伝を見る限り、まるで文帝自身の強い意向によるかのように思われたこの一件でさえ、少なくとも曹植の目が捉えた現実はこのとおりだったのである⑬。それは、必ずしも曹植の希望的主観とばかりは言えまい。前述のとおり、その後の文帝は曹植の苦境を幾度となく救うことになるのであって、そうした曹丕の事蹟から推し測って、このように判断して差し支えないだろう。

さて、ここに見えている皇帝の姿は、先にその素描を示した新たな曹丕像とよく重なり合う。曹丕はたしかに、優柔不断な、私情に流されがちな、為政者としてはその任に堪え得ない質の人間であったかもしれない。だが、彼がそうした態度を取ろうとするその背後には、皇帝の意向よりも強い発言力を持つ臣下たちの存在がある。また、皇帝の思いを得手勝手に忖度し、諸王たちの言動を虚実取り混ぜて事細かに報告し、それで主君の歓心を買ったつもりになっている連中もいる。彼らはいったい何を企図してそうした言動に至ったのか。それは、この中世初頭、曹魏王朝という歴史的階梯にどう位置づけられるのか。そうしたことを視野に入れない限り、文帝曹丕の為政者としての為人も、また結果として彼の差配にその生涯を翻弄されることとなった曹植ら弟たちの境遇も、その実態を過不足なく描き出すことはできないだろう。ただ、今のところ見通せるのはここまでであって、これより先のことは今後の課題としたい。

三

以上を要するに、曹植ら諸王に対する魏王朝の冷遇は、その中枢にある文帝曹丕の意向に出るものというよりは、むしろ、その周辺に蝟集する者たちの様々な思惑が複合的に絡まり合って作用した結果と見るのが実態に近いと言えるだろう。では、そうした王朝の実情は、かかる厄難を被る側にあった曹植にどこまで見えていたのだろうか。もっとも、ここまでの検討は多く曹植自身の記述に拠っているのだから、理の当然として、彼はこのことを認識していたはずだと言えはするのだが、その心情としては本当のところどうだったか。というのは、先にも触れた「黄初六年令」に、黄初四年（二二三）に雍丘王となってから今に至るまでの三年間、ついに監官の摘発する所とはならなかったことを、曹植は歓喜とともに「信心足以貫於神明也（信心の以て神明を貫くに足るなり）」、「固精誠⑭可以動天地金石、何況於人乎（固より精誠の以て天地金石を動かす可し、何ぞ況んや人に於いてをや）」と述べているからである。自身の潔白が証明されたことを奇跡だとまで言うこの表現は、自身の処遇に係る最終判断を下すべき文帝の真意が、曹植からは今ひとつ明瞭には見えていなかったことを示唆する。以下、曹植詩の一端を取り上げ、その中に彼の曹丕に対する正直な思いを探ってみたい。

曹植の詩には、暗に曹丕のことを指しているかと思われる表現が少なからず認められるが、その一例として、まず『文選』巻二十九所収「雑詩六首」の其一を取り上げよう。訓み下しは省略する。

高台多悲風　　高くそびえる楼台に悲しげな風がひどく吹きつけ、
朝日照北林　　朝日が北の林を照らしている。
之子在万里　　一方、この人は都から万里も隔てられた彼方にいて、
江湖迥且深　　江湖の広がるその地は、遠くかつ深く分け入った先にある。
方舟安可極　　舟を泛べても、どうしてそこまでたどり着くことができようか。

離思故難任　　離別した人への思いはもとより耐え難いものだけれど。
孤雁飛南遊　　つれあいを失った雁が南の空を飛び回り、
過庭長哀吟　　わが庭をよぎって悲しげな鳴き声を長く引く。
翹思慕遠人　　遠くにいる人を慕って、私は思いを空高くかかげ、
願欲託遺音　　鳥の残した鳴き声に託してこの思いを送り届けたいと願う。
形影忽不見　　けれど、鳥の姿も影もあっという間に見えなくなって、
翩翩傷我心　　ひらひらと翻る幻影を追いつつ、私の胸は張り裂けんばかりだ。

本詩が詠ずるのは、遠い南方にいる親しい者への思慕の情である。そして、その思慕の対象とは、先人が説くとおり⑮、当時、呉王に任ぜられていた曹彪と見て間違いないだろう。彼は、前章でも触れた「贈白馬王彪」詩の中で、曹植が「離別永無会、執手将何時（離別せば永く会ふこと無からん、手を執るは将（は）た何れの時ぞ）」、「王其愛玉体、倶享黄髪期（王よ其れ玉体を愛せよ、倶に黄髪の期を享（う）けん）」との言葉とともに、涙を振り払って別れた異母弟である。彼ら兄弟は、その帰途を共にすることさえも阻止されたのであった。

そこで注目されるのが、一句目の「高台多悲風」である。この句は、曹植「野田黄雀行」（『楽府詩集』巻三十九）の冒頭にも、「高樹多悲風（高樹に悲風多し）」との類似句が認められ、この楽府詩は、魏王曹丕による丁儀・丁廙兄弟の誅殺を背景に作られたと見る説が有力である⑯。すると、その冒頭句をほとんど共有している本「雑詩」も、曹魏政権によって虐げられている者に心を傷める詩である可能性が高いと言えるだろう。思えば、呉王曹彪は、魏王朝の対諸王政策により、中原から遠く離れた土地で孤絶を余儀なくされている人物である。彼を思い遣って詠ずる本詩が、その冒頭にかの「野田黄雀行」を想起させる句を置いているのは、まことに意を以て構えられた表現であるように思われる。

この「高台」は、魏王朝の総体を指していると見てよいだろうが、更に言えば、曹植の目には、この高

楼に文帝曹丕の影が重なって見えていたようにも思われる。というのは、本詩の第二句には、曹丕作の歌辞に共通する語がはめ込まれているからである。すなわち、「朝日照北林」の「朝日」は、語義こそずれるが、曹丕作の「善哉行」（『宋書』巻二十一・楽志三）に「朝日楽相楽（朝日　楽しみて相楽しむ）」と見え、「北林」⑰は、「朝游高台観（朝に高台観に游ぶ）」を冒頭に置く曹丕「善哉行」（『宋書』楽志三）にも、「飛鳥翻翔舞、悲鳴集北林（飛鳥は翻翔して舞ひ、悲鳴して北林に集まる）」と見えているのがそれである。曹丕の「善哉行」二首は、制作年は不明だが、そのいずれもが宴席で歌われたと推測される内容であり、しかも、曹丕は黄初七年（二二六）に亡くなるので、曹植のこの「雑詩」の成立が、前掲の曹丕の歌辞に先んじる可能性は低い。むしろ、黄初四年、兄弟たちと共に都に呼び出された曹植が、宮中で演奏される曹丕の歌辞を耳にしていた可能性の方が高いと言えるだろう。

曹植の「雑詩六首」其一は、第一義的な主題としては、遠方に隔てられた人への思いを詠ずるものである。ただ、そのひたすらな離別の情は、冒頭二句に配せられた表現により、そうした情況を作り出した現王朝と、それを差配しているはずの文帝への疑念という、そこはかとない影を纏うこととなったのだと解釈し得る。

さて、次に取り上げたいのは、『玉台新詠』巻二所収「雑詩五首」其四である。この作品は、一見したところ、夫との離別を悲しみ、愛情の復活を希求する女性の心情を詠ずる閨怨詩であるが、そこには、曹植の曹丕に対する思いを重ねて見ることができる。まずは、その全文を、通釈と共に提示しよう。訓み下しは省略する。

攬衣出中閨　　衣を手に取り、奥の部屋を出て、
逍遥歩両楹　　二つの柱の間をさまよい歩く。
閑房何寂寞　　ひっそりとした脇部屋のなんともの寂しげなことだろう。
緑草被階庭　　緑の草が、階や庭一面を被って繁茂している。

空室自生風　空っぽの部屋には自ずから風が立ち、
百鳥翔南征　たくさんの鳥たちが羽ばたいて南の方へ飛んでゆく。
春思安可忘　あなたを思う気持ちはどうして忘れることができましょう。
憂感与我并　憂い悲しみが私とひとつになって胸がいっぱいになります。
佳人在遠道　良き人は遠い道の彼方にいて、
妾身独単煢　私だけがぽつんとひとりぼっちです。
懽会難再遇　楽しかった逢瀬には再びめぐり合うことは難しく、
蘭芝不重栄　めでたき蘭や霊芝も重ねて花開くことはありません。
人皆棄旧愛　人は皆、昔からの情愛を捨て去ってしまうもので、
君豈若平生　あなたもどうして昔のようであられましょう。
寄松為女蘿　私は、松に身を寄せるヒメカズラ、
依水如浮萍　水に身を委ねる浮草のようです。
束身奉衿帯　身を慎んで妻の道に励み、
朝夕不堕傾　朝な夕なに落ち度がないよう努めます。
儻願終顧盼　もしも最後まで目をかけていただけるならば、
永副我中情　永遠に私の真心を尽くしておそばにお仕えいたします。

典型的な閨怨詩のスタイルを取る本詩が、なぜ兄への思いを詠じたものだと言えるのか。決め手は、妻が自らの境遇をたとえた「寄松為女蘿」である。これは、『毛詩』小雅「頍弁」にいう「豈伊異人、兄弟匪他。蔦与女蘿、施于松柏（豈に伊（こ）れ異人ならんや、兄弟にして他に匪（あら）ず。蔦と女蘿と、松柏に施（し）く）」を踏まえた表現で、そこでの女蘿と松とは、兄弟の絆の深さをたとえる暗喩である。「女蘿」と言えば、『文選』巻二十九「古詩十九首」其八にいう「与君為新婚、兎絲附女蘿（君と新婚を為すこと、兎絲の女

蘿に附くがごとし）」も想起されるが、曹植詩に詠われた女蘿は松に身を寄せているので、前掲の『毛詩』を直に踏まえていると見て間違いない。すると、もし本詩にいう「妾」が作者曹植の自己仮託だとすれば、「佳人」「君」は曹丕を指すということになるだろう。

更に言えば、詩中に見える「蘭芝」は、治世の安定に感応して生ずる霊草であり⑱、また、昔を振り返っていう「君豈若平生（君豈に平生の若くならんや）」という句も見えているので、本詩に詠われた「佳人」とは、すでに魏の文帝として即位して後の曹丕と見るのが妥当だろう。そして、この句は、前句「人皆棄旧愛（人は皆棄旧愛を（人は皆　旧愛を棄つ）」を受けていうものであることから、曹植はこの時点で、文帝として即位した兄曹丕のことを、自分がよく知るかつての兄とは異なる、遠い存在となってしまった人と見ていることになるだろう。その上で、再び彼の恩情を求めて忠誠を誓っているのである。

以上、文帝曹丕に対する曹植の心情が窺われる詩の一端を示したが、ここに取り上げた二首の詩はいずれも、彼が王朝内部の事情をある程度把握していたはずであるにもかかわらず、ゆるぎない信頼感には程遠い、相手の真意が見えない不安感を隠微に吐露するものであった。

むすびにかえて

魏の文帝として即位してからの曹丕は、表向きには頻繁な転封など、曹植に対して酷薄とも言える処遇を繰り返す一方、拙論で指摘したとおり、王朝内部では、幾度もその苦境から彼を救い出す措置を講じた。それだけに、曹植には曹丕の真意が読み取りにくかったのかもしれない。そればかりではない。彼らの少年時代は、親密な愛情で満たされた、至って幸福な家庭環境の中にあったと想像される。だからこそ、往年の兄弟関係と引き比べ、現在の境遇の過酷さが一層苛烈に感じられるという側面もあったのではないか。

『魏志』巻二十・武文世王公伝によれば、曹操には二十五人の息子がいたというが、これに娘たちも合

わせれば、相当な人数の子どもたちが同一敷地内でともに暮らしていたことになる。夭折した者も少なくなかったが、それでも気の置けない子どもたち同士、賑やかな日常生活を送っていただろう。加えて曹操は、曹休や曹真など、一族の子で親を失った者たちを積極的に家族の一員に迎え入れ、我が子同然に育てている（『魏志』巻九・諸夏侯曹伝）。こうした育児環境は、旧中国の大家族制度にあっては常識的なことなのかもしれない。だが、もしかしたら曹操は、将来への布石として、血縁関係を基礎に置く強靭な協力体制を、幼少期の頃から、その日常の中で構築させようと企図していたとも考えられる。

曹操の在世当時、曹丕・曹植兄弟の間柄が至って親密なものであったことは、たとえば、次に示す曹植「離思賦」序（『藝文類聚』巻二十一）に、

建安十六年、大軍西討馬超、太子留監国、植時従焉。意有懐恋、遂作離思之賦。

建安十六年（二一一）、大軍は西のかた馬超を討つに、太子は監国に留まり、植は時に焉（こ）れに従ふ。意に懐恋有り、遂に「離思の賦」を作る。

とあることからも十分に窺い知ることができる。当時二十歳であった曹植は、関中の馬超を討伐するため、曹操の率いる大軍に従っていたが、時に曹丕は本拠地である冀州の留守を守っていた。そして、これと同じ機会に作られたと見られる曹丕の「感離賦」序（『藝文類聚』巻三十）には、「建安十六年、上西征、余居守、老母諸弟皆従。不勝思慕、乃作賦（建安十六年、上の西征するとき、余は居守し、老母諸弟は皆従ふ。思慕に勝へず、乃ち賦を作る）」とある。兄を思慕して已まない弟に対して、ひとり国に留まる兄の方は、父に付き従う家族たちの皆に恋慕の情を寄せているのである。これが、曹氏一家の本来的な姿であっただろう。それが、魏王朝の成立と同時に暗転し、家族を結び合わせていた糸は断ち切られてしまったのである。それは、先にも見通しとして述べたとおり、曹丕の為政者としての力量不足とばかりは言えない、魏王朝ならではの事情が引き起こした、不幸としか言いようのない成り行きであったのだろうと

推し測られる。

このことを象徴的に示唆する作品として、次に示す曹植の楽府詩（『太平御覧』巻七六六）がある。

膠漆至堅　膠（にかわ）と漆（うるし）とは、この上なく堅固に結びあうものですが、
浸之則離　これを水に浸したならば、離れ離れになります。
皎皎素絲　白く輝く、まっさらな絹糸も、
随染色移　染めるにしたがって色が移ってゆきます。
君不我棄　あなた様が私をお見捨てになったのではなくて、
讒人所為　讒言する者たちのせいで私たちは引き裂かれたのです。

本作品は、「膠漆」「素絲」といった言葉から、寵愛を失った女性の怨みを歌う楽府詩と見られるが、更に、この閨怨詩のスタイルに仮託して、君臣関係の難しさを詠じているもののように読める。制作時期は未詳ながら、その主題から、曹丕が魏の文帝として即位して以降である可能性が高いと判断されよう。そうした作品の中で、自分と君主との間を引き裂いたのは、第三者の讒言なのだと曹植は詠じているのである。この曹植の示唆を念頭に置きながら、今しばらく、曹魏王朝の成り立ちや人的構成などを押さえ、その中に曹氏兄弟の動向を位置付ける考察を継続してゆきたい。

注

① 臨淄侯曹植が封土に赴いた時期については、拙論「黄初年間における曹植の動向」（『県立広島大学地域創生学部紀要』第二号、二〇二三年）で詳しく検討した。

② 曹彰と曹植とでは、封土に赴いた時期が異なると推測される。詳細は、前掲論文①を参照されたい。

③ このことについては、拙論「曹植「贈丁儀」詩小考」（『林田愼之助博士傘寿記念三国志論集』汲古書院、

二〇一二年）の第三章で論及した。

④津田資久「『魏略』の基礎的研究」（『史朋』第三一号、一九九八年）、及び拙論「『魏略』の撰者、魚豢の思想」（『狩野直禎先生米寿記念三国志論集』（汲古書院、二〇一六年）を参照されたい。

⑤前掲注③の拙論第三章で述べた。

⑥監国謁者を始め、魏王朝における諸王政策の実態については、津田資久「曹魏至親諸王攷―『魏志』陳思王植伝の再検討を中心として―」（『史朋』三八号二〇〇五年一二月）第三章に詳しく論じられている。

⑦この一件、及び続く一段に記したことの詳細は、前掲注①の拙論を参照されたい。

⑧「寮」字、『曹集詮評』は「師」に作る。『藝文類聚』巻五十四に拠って改める。

⑨『儀礼』喪服にいう「諸侯之子、称公子。公子不得禰先君。公子之子、称公孫。公孫不得祖諸侯（諸侯の子は、公子と称す。公子は先君を禰とするを得ず。公子の子は、公孫と称す。公孫は諸侯を祖とするを得ず）」を踏まえる。

⑩『礼記』喪服小記にいう「庶子不祭祖者、明其宗也（庶子が祖を祭らざるは、その宗を明らかにするなり）」を指すか。

⑪この句が踏まえる『毛詩』大雅「仮楽」にいう「不愆不忘、率由旧章（愆たず忘れず、旧章に率ひ由る）」は、曹植「責躬詩」（『文選』巻二十）でも、「万邦既化、率由旧則。広命懿親、以藩王国（万邦既に化し、旧則に率ひ由る。広く懿親に命じ、以て王国に藩たらしむ）」と、同様の文脈の中で用いられている。このことは、曹植「鼙舞歌・聖皇篇」が、事実上、曹魏王朝のことを指して詠ずるものであることを裏付ける傍証ともなり得る。なお、詩はこの重要な典故表現を配置したところで換韻し、一段落が収束する。

⑫詳細は、拙論「漢代鼙舞歌辞考―曹植「鼙舞歌」五篇を媒介として」（『中国文化』第七三号、二〇一五年）を参照されたい。

⑬津田資久「『魏志』の帝室衰亡叙述に見える陳寿の政治意識」（『東洋学報』第八四巻第四号、二〇〇三年）は、『三国志』に認められる史実の改変を指摘し、それは当代的問題に対する編者陳寿の政治意識に由来すると論じている。

⑭「誠」字、『曹集詮評』は「神」に作る。『文館詞林』巻六九五に拠って改める。

⑮黄節『曹子建詩註』（中華書局、一九七六年重印）一一頁に、清の陳祚明『采菽堂古詩選』巻六の説を引いて、本詩にいう「之子」は、黄初三年、呉王に遷った曹彪を指す可能性があると述べるほか、余冠英『三曹詩選』（人民文学出版社、一九五六年第一版）も同様の説を取る。

⑯黄節前掲書九八頁を始め、多くの先人がこの説を取る。妥当と判断される。

⑰この語は、『毛詩』秦風「晨風」に「鴥彼晨風、鬱彼北林（鴥たる彼の晨風、鬱たる彼の北林）」、毛伝に「先君招賢人、賢人往之、駃疾如晨風之飛入北林（先君は賢人を招き、賢人は之に往き、駃疾たること晨風の飛びて北林に入るが如し）」とあるのを踏まえて、君主に召された人々が集う場所をいう。

⑱『文選』巻十一、王延寿「魯霊光殿賦」の李善注に引く『礼斗威儀』に「君乗金而王、其政平、則蘭芝常生（君は金に乗じて王たり、其の政平らかなれば、則ち蘭芝常に生ず）」とある。

この原稿は、『大上正美先生傘寿記念三国志論集（汲古書院、二〇二三年）に寄せたものです。最終版については、本書をご覧ください。